

## 日本聖公会最初の聖歌、C. M. ウィリアムズ訳聖歌をめぐって

手代木俊一

### はじめに

筆者は立教学院史資料センターのプロジェクト2「立教築地時代の研究」に研究員の一人として参加している。立教築地時代とは明治7(1874)年から大正7(1918)年までであるが、日本の讃美歌・聖歌史で「立教築地時代」の大部分を占める明治時代、特にウィリアムズが東京に主教座を定める明治6年から7年は初めて日本語の讃美歌・聖歌が誕生した時代で、「立教築地時代」初期の日本聖公会聖歌を検証することは日本の讃美歌・聖歌史の上で重要であると思われる。

この時代、築地で訳されたと思われる聖公会の聖歌として、立教の創設者 C. M. ウィリアムズが訳した聖歌が何篇も存在することが知られているが、まだ本格的な研究はなされていない。このウィリアムズ訳聖歌を検証することは日本の讃美歌・聖歌の揺籃期を知る上で重要なばかりでなく、「立教築地時代の研究」の一つのてがかりとなりうると考える次第である。

また筆者は、『立教学院史研究』第3号掲載「日本聖公会聖歌目録」の〈はじめに〉で「本目録は聖歌集として刊行された出版物だけを対象とし、明治初期、聖歌集に収録というかたちでは現存しない C. M. ウィリアムズ訳《よよいわわれて》等個々の翻訳聖歌に関しては、本目録には収録せず、別稿でその内容をあきらかにしたい」(注1)と述べた。本稿「日本聖公会最初の聖歌、C. M. ウィリアムズ訳聖歌をめぐって」はこの別稿にあたる。

さて、明治5-7年頃ウィリアムズが訳したとされる聖歌が現在7篇《世々岩ハレテ》、《エスヲ地ノ主トセン》、《十字架ニカケラル》、《アマ使ガウタウ》、《われをばたのまじ》、《なみかぜのあらし》、《われのみかに》知られており、うち4篇は歌詞の内容も伝わっている。しかしその内の2篇がどの聖歌から訳されたか特定されていない。ウィリアムズ訳として知られる《世々岩ハレテ》、及び《エスヲ地ノ主トセン》に触れ、原歌詞が何であるか特定されていない2篇の聖歌の原歌詞をあきらかにし、残り3篇の聖歌についても検討を加えたい。そしてウィリアムズ訳聖歌がその後の日本の聖歌・讃美歌に及ぼした影響、特に日本の讃美歌に大きな貢献をした日本基督教会牧師の奥野昌綱とアメリカ長老派宣教師ヘンリー・ルーミスに与えた影響について言及し、また逆に日本聖公会が受けた日本基督教会の讃美歌、特に奥野昌綱からの影響にも触れたい。

### 明治期日本聖公会聖歌の概観

ウィリアムズ訳聖歌を検討する前に明治期日本聖公会聖歌を概観する。

明治期聖公会の伝道は、安政6(1859)年来日の J. リギンス、C. M. ウィリアムズのアメリカ聖公会、明治2(1869)年来日 G. エンソルのイギリス教会宣教会(CMS)、明治6(1873)年来日の W. B. ラ

イトと A. C. ショウのイギリス海外福音伝道会 (SPG) の3つの伝道団体によって始められた。明治20 (1887) 年第1回総会において日本聖公会の組織が成立する。それまでは各海外伝道団体の宣教師を中心に聖歌集が刊行された。聖歌集に関わる宣教師は、アメリカ聖公会では、C. M. ウィリアムズ、T. S. チング。イギリス教会宣教会 (CMS) では、H. エヴィントン、C. F. ワーレン、W. アンドリウス、W. デニング、J. バチュラー。イギリス海外福音伝道会 (SPG) では、W. B. ライト、H. J. フォス、A. ロイドであった (注2)。

T. S. チング (アメリカ聖公会) 編の『聖公會歌集』(明治16 [1883] 年9月)の序には H. エヴィントン、C. F. ワーレン (CMS)、H. J. フォス (SPG) への賛辞があり、3つの伝道団体の協力態勢がうかがえる。明治20 (1887) 年第1回総会后、3つの伝道団体の共通讃美歌である吉澤直江編著『聖公會讃美歌』が明治25 (1892) 年に、古今聖歌集編纂委員会編『古今聖歌集』が明治35 (1902) 年に刊行され、A. ロイドはこの『古今聖歌集』のローマ字版を作成した。以後この『古今聖歌集』の改訂版が日本聖公会の聖歌集の主流となる。

また B. H. チェンバーレンは詩篇の個人訳「讃美之歌」(詩篇歌)を明治13 (1880) 年4月に論文「Suggestions for a Japanese Rendering of Psalms」とともに『Transaction of Asiatic Society in Japan』(Vol. VIII, Pt. 3. Apr. 1880)の誌上で発表した (注3)。

明治期の日本聖公会の聖歌集を年代順に掲載する。(詳細は拙著「日本聖公会聖歌目録」参照) (注4)

- \*明治7 (1874)             たゝへのうた    エヴィントン著
- \*明治9 (1876)            使徒公會之歌    [W. B. ライト] 編
- \*明治9 (1876)            使徒公會之歌    [W. B. ライト] 編
- \*明治10 (1877)           讃美之歌 [フォス]
- \*明治11 (1878)           聖公會讃美歌    アンドリウス編
- \*明治11 (1878)           眞神讃美頌    耶蘇降世 1878年 [ワーレン] 編
- \*明治13 (1880)           眞神讃美歌    シ、エフ、ワレン・エイチ、ゼ、フォス著
- \*明治13 (1880)、4        讃美之歌    B. H. チェンバーレン訳編
- \*明治14 (1881)           基督公會之歌    [フォス] 編
- \*明治14 (1881)、8        讃神歌    [W. デニング] 編
- \*明治15 (1882)           祈禱之歌    アンドリウス編
- \*明治15 (1882)           聖公會讃美歌    アンドリウス編
- \*明治15 (1882)           眞神讃美歌    全 [アンドリウス] 編
- \*明治16 (1883)、9        聖公會歌集    [チング] 編
- \*明治17 (1884)           聖公會歌集    [増補] [チング編]
- \*明治20 (1887)、4        聖公會歌集    チング編 再版4版
- \*明治23 (1890)           基督降誕日の歌 [フォス] 編
- \*明治23 (1890)、11       日曜学校うたあつめ THE SUNDAY SCHOOL HYMNBOOK 辻井良吉編
- \*明治24 (1891)、7        聖公會讃美歌    ヒウ・ゼ・フラス [編]
- \*明治25 (1892)、9        聖公會讃美歌    譜附 耶蘇降生 1892年 吉澤直江著

- \*明治 28 (1895) NIPPON SEIKOKAI AINU KARISIA [J. バチュラー] 編
- \*明治 29 (1896) 受苦節の歌 フォス編
- \*明治 29 (1896) 受苦節聖日の歌 フラス編
- \*明治 29 (1896) 降誕日のうた CHRISTMAS CAROLS [H. J. フォス] 編
- \*明治 29 (1896) 聖日の歌 フォス師編
- \*明治 34 (1901)、12 古今聖歌集 古今聖歌集編纂委員会編
- \*明治 35 (1902)、6 古今聖歌集 譜附 HYMNS NEW & OLD WITH MUSIC  
古今聖歌集編纂委員会編
- \*明治 35 (1902)、6 KOKIN-SEIKASHU HYMNS OLD AND NEW アーサー・ロイド著
- \*明治 35 (1902)、11 降誕日の歌 譜附 著者兼発行者 ヒュゼームス フォス
- \*明治 35 (1902)、11 降誕日のうた ([ ] は補記を示す)

聖公会系の現存する聖歌集でもっとも古い聖歌集は『使徒公會之歌』であるが、記録に残る最初の聖歌集は、明治七年の『たゝへのうた』(エヴィントン著)である。しかし残念ながら所蔵先不明である(注5)。

### C. M. ウィリアムズと聖歌

C. M. ウィリアムズと聖歌に関する記述はきわめて少ない。大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』にはウィリアムズが明治43(1910)年12月2日にリッチモンドで就眠し、12月4日に東京聖三一大聖堂で行われた遥葬式の様子が書かれている。この時聖堂に響いた曲がウィリアムズ愛唱聖歌《聖歌311》であった(注6)。この《聖歌311》とは『古今聖歌集』(明治35年)の第311番《つかるものみな》のことであろう(注7)。この《つかるものみな》は後述するウィリアムズが訳したとされる聖歌の一つではないようである。

大江氏が遥葬式の典拠としてあげている『基督教週報』第22巻第16号(明治43[1910]年12月16日)は「老監督記念号」で、ウィリアムズの遥葬式で歌われた他の聖歌が記載されている(注8)。北東京地方(監督マキム)では、第125番、第311番(監督愛誦)、第293番、第95番(式次第順)が歌われ、12月9日に行われた京都地方(監督パトリッチ)の追悼式では第349番、第293番、第153番(式次第順)が歌われた。北東京地方、京都地方で共通に歌われた『古今聖歌集』(明治35年)第293番は《ちとせのいはよ》でウィリアムズが《Rock of ages》から明治5年頃訳したとされる《よいわわれて》の別の訳(改訳?)である。『古今聖歌集』(明治35年)では「雑歌」にあたり「送別」とは無縁の聖歌であるが、彼の聖歌翻訳での偉業をたたえる目的で歌われたのであろうか。

ちなみに第125番は《For all the saints who from their labours rest》の訳《このよのいくさををへ》、第95番は《Jesus lives! no longer now》の訳《主いきたまへば》、第349番は《Nearer, my God, to Thee》の訳《主よみもとに》、第153番は《Now the Labourer's task is o'er》の訳《たゝかひををへ》である。第349番は《Nearer, my God, to Thee》の訳《主よみもとに》も後述するがウィリア

ムズが明治5年頃訳したとされる《われのかみに》の別の訳（改訳？）である。

C. M. ウィリアムズと聖歌に関する記述はきわめて少ない上に、大江満氏によればウィリアムズ自身が書簡等に翻訳した聖歌に関して記録を残していないとのことである（注9）。また、その後の聖公会の聖歌の翻訳、作詞、作曲、聖歌集の編集にはウィリアムズはまったく関わっていない。

さて、上記遥葬式、追悼式以外の記録では、明治5年頃、C. M. ウィリアムズが5篇の聖歌を翻訳したという記述「《Rock of ages》《よゝいわわれて》を訳し、続いて《われをばたのまじ》、《なみかせのあらき》、《われのかみに》、《十字架にかかりし》等を訳された」が元田作之進著『老監督ウィリアムズ』に存在する（注10）。しかも元田作之進著『老監督ウィリアムズ』には《Rock of ages》の日本語訳が歌われたことが明治6年3月14日付モリス書簡の一節に存在することが書かれている（注11）。大阪時代に《よゝいわわれて》を訳し、築地に来てから《われをばたのまじ》、《なみかせのあらき》、《われのかみに》、《十字架にかかりし》等を訳したのであろうか。これは、明治7年の『たゝへのうた』（エヴィントン著）よりもはやく、日本聖公会聖歌の嚆矢といえるであろう。しかし残念ながらどのような訳詞であったか、また原歌詞の記述もなく、どのような聖歌であったか知ることはできず、伝聞だけが残った（注12）。

明治7年になるが、フルベッキはその著『日本プロテスタント伝道史 上』の「第三章 一八七四年の諸教派」でウィリアムズが《千歳の岩よ》を訳したことを報告している（注13）。

昭和40（1965）年に、矢崎健一氏は「手写本『早晚祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号（昭和40〔1965〕年9月）（注14）をあらわし、手写本をタイプライターによって打ちかえたものから4篇の聖歌（《十字架ニカケラル》《世々岩ハレテ》《エスヲ地ノ主トセン》《アマ使ガウタウホメヨ生レン王》）を活字化した。矢崎健一氏はこの資料を立教大学小川徳治教授から立教大学図書館に寄贈された同氏の岳父貫民之介師（元立教大学教授、日本聖公会司祭）旧蔵資料の中から発見した（注15）。矢崎健一氏も述べているが、これにより元田作之進著『老監督ウィリアムズ』記載の《よゝいわわれて》、《十字架にかかりし》の歌詞を知ることができるようになった（注16）。また矢崎健一氏はこの論文でこの聖歌4篇の訳者がウィリアムズであることを証明している（注17）。ここにその4篇を転載する（注18）。

## 明治初期ウィリアムズ訳日本聖公会聖歌

### 1、十字架ニカケラル

ワカキミミルトキ  
世ノトミリアラス  
タカブリナサマシ

十字架ノホカニハ  
ホマリライダサヌ  
ワカスクモノヲバ

### 2、世々岩ハレテ

ワカ身ヲカクセ  
キツセン脇ニ  
ナカシシ水血  
ツミヨリ救フテ

我ムネアラヘ

ナミダ流セト カライダスモ

主ノ血ニソナヘン

ミヨ主ノ御身ヨリ  
苦ト愛トナカレル  
苦愛カリアワマシ  
イバラヲ口トセス

天ト地ヲサハクモ  
供物ニタラマシ  
タルモノナラネト  
イノチヲアグベシ

3、エスヲ地ノ主トセン  
アマネクソヲサメン  
ソノマツリコトハ  
カキリナクアレナ

人ハエスニネカハン  
マタツネニ貴トバン  
エスノナハナカク  
イノリテアケラル  
ヲサムルトコロニ  
メクミチミテル  
ナヤム人ハスベテ  
エスノ地ニヤスメ

カレハコレヲ ウ  
信者ガタスケヲ受  
コノ身ハシヌトモ  
タマシイハ天ニアル

バン民ハ今神ヲ  
イヤタカク救ヨ  
天ノ使ハシラセン  
ミナウヘヨ アーメン

是ハ罪ケサス (ママ) 主ノミタスク  
罪代モタアズ 十字架ニスガル

マブタヲトサシ ヒキトルイキニ  
ミヌ世ニノホリ ミ位ヲミルニ  
世位岩ハレテ ワカ身ヲカクセ

4、アマ使ガウタウホメヨ生レシ王  
カミト人シタシム地ニハ太平アル  
クニグニタチテカチドキアハセ  
アマ使トイヘヨベツレヘムニ生ルト

天ヨリホメラルキリストイクレ主  
地ニクルヲミヨヲトメノウム子

エスイマヌエル人トトモニスム  
カクレシ神ノ人トナルヲミヨ  
ヒカリトイノチスベテサヅケシ  
太平ノアルジト義ノ日ヲホメヨ

## 《世々岩ハレテ》の2つの出典の比較

また昭和 59 (1984) 年、別のルートからこの《よよいわわれて》が今井蒸治司祭によって『礼拝研究』(No. 3) で紹介された。今井氏はロンドン、ウェストミンスターの上SPG (合同福音宣教協会) の資料室で 1874 年 6 月 23 日付 W. B. ライト書簡の中からローマ字で書かれた《よよいわわれて》を発見した。この書簡の発見により明治 7 年には《Rock of ages》の翻訳聖歌《よよいわわれて》が存在したことが明らかになった。ここに『礼拝研究』(No. 3) 掲載の《よよいわわれて》を載録する(注 19)。

よよいわわれて  
わがみをかくせ  
きずせしわきに  
ながれしみずち  
つみよりすくいて  
わがむねあらえ

Rock of ages, cleft for me,  
Let me hide myself in thee,  
Let the water and the blood  
From thy side, a healing flood,  
Be of sin thy double cure,  
Cleanse me from its guilt and power.

なみだながせど  
ちからいだすも  
こはつみけさぬ  
ぬしのみたすく！  
つみしろもたず  
じゅうじかにすがれ

Should my tears for ever flow,  
Should my zeal no languor know,  
All for sin could not atone:  
Thou must save, and thou alone;  
In my hand no price I bring,  
Simply to thy cross I cling.

まぶたをとぎし  
ひきとるいきに  
×××にのぼり  
みくらをみるに  
よよいわわれて  
わがみをかくせ

While I draw this fleeting breath,  
When mine eyelids close in death,  
When I rise to worlds unknown  
And behold thee on thy throne,  
Rock of ages, cleft for me,  
Let me hide myself in thee.

2つの資料は活字化する際、本来同じものを見間違えてしまった可能性はあるが、2点の資料には多少の相違点が存在する。2つの翻訳を比較してみたい。

よよいわわれて	世々岩ハレテ
わがみをかくせ	ワカ身ヲカクセ
きずせしわきに	キツセシ脇ニ
ながれしみずち	ナカシシ水血
つみよりすくいて	ツミヨリ救フテ
わがむねあらえ	我ムネアラヘ

なみだながせど	ナミダ流セト
ちからいだすも	カライダスモ
こはつみけさぬ	是ハ罪ケサス (ママ)
ぬしのみたすく!	主ノミタスク
つみしろもたず	罪代モタアズ
じゅうじかにすがれ	十字架ニスガル
まぶたとごし	マブタヲトサシ
ひきとるいきに	ヒキトルイキニ
×××にのぼり	ミヌ世ニノホリ
みくらをみるに	ミ位ヲミルニ
よよいわわれて	世位岩ハレテ
わがみをかくせ	ワカ身ヲカクセ

「きずせしわきに」「キツセシ脇ニ」、「ながれしみずち」「ナカシシ水血」、「つみよりすくいて」「ツミヨリ救フテ」、「ちからいだすも」「カライダスモ」、「こはつみけさぬ」「是ハ罪ケサス (ママ)」、「つみしろもたず」「罪代モタアズ」、「じゅうじかにすがれ」「十字架ニスガル」、「まぶたとごし」「マブタヲトサシ」、「みくらをみるに」「ミ位ヲミルニ」、「よよいわわれて」「世位岩ハレテ」が相違点であるが、二つの訳は同じものと考えて構わないのではなからうか。ローマ字から人を介して伝わったため多少の誤差が生じたものと思われる。今井丞治氏は「×××」と解読不明箇所を不明のまま記載し、特に注記をしていない。この時点では今井氏は矢崎健一著「手写本『早晚祷文・利多仁伊』について」の存在を知らなかったのではないかと思われる (注 20)。

### どの英語讃美歌 (集) から訳したのか、原歌詞との対比

さて、《世々岩ハレテ》は《Rock of ages》の翻訳であることは判明しているが (注 21)、他の聖歌は何から訳されたものなのであろうか。次に展開してみたい。

現存する日本聖公会の聖歌集の最も古い聖歌集は明治 9 (1876) 年の『使徒公會之歌』(W. B. ライ

ト編)であるが、『使徒公會之歌』に収録された26曲の聖歌には《Rock of ages》の翻訳もなく、ウィリアムズ訳聖歌は受け継がれなかった。W. B. ライトは(SPG)なので、ウィリアムズと同じアメリカ聖公会のチング編『聖公會歌集』(明治16 [1883]、明治17 [1884]、明治20 [1887]年)収録聖歌を見てウィリアムズ訳聖歌の系譜はみとめられない。既に10年以上たっているからであろうか。あくまで試訳して手元においておいたもので、公開はされなかったものなのであろうか。この『聖公會歌集』と《Rock of ages》の翻訳に関しては後述する。

翻訳から原歌詞を特定すると、《エスラ地ノ主トセン》はアイザック・ウォッツの《Jesus shall reign where'er the sun》の翻訳であろう。また矢崎氏が指摘(注22)しているように《エスラ地ノ主トセン》と同様の訳《エス地の主とならん》が『教のうた』(明治7 [1774]年)に収録されており、これはアイザック・ウォッツの《Jesus shall reign where'er the sun》の翻訳であることがあきらかになっている。

翻訳歌詞の内容から《十字架ニカケラル》は、これもアイザック・ウォッツの《When I survey the wondrous cross》で、《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》はチャールズ・ウェスレーの《Hark, herald angels sing》であろう。現行『古今聖歌集』(昭和34 [1959]年4月)では、《十字架ニカケラル》が第77番《みさかえのきみの》、《世々岩ハレテ》は第387番《ちとせのいわよ》、《エスラ地ノ主トセン》は第46番《日のてるかぎりは》、《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》は第18番《かみにはさかえ》である。

原歌詞と翻訳を対比する(注23)。

- |  |  |
|--|--|
| 1、十字架ニカケラル<br>ワカキミミルトキ<br>世ノトミリアラス<br>タカブリナサマシ | (1) When I survey the wondrous Cross<br>On Which the Prince of Glory died,<br>My richest gain I count but loss,<br>And pour contempt on all my pride.          |
| 十字架ノホカニハ<br>ホマリライダサヌ<br>ワカスクモノラバ<br>主ノ血ニソナヘン   | (2) Forbid it, Lord, that I should boast<br>Save in the Cross of Christ, my God;<br>All the vain things that charm me most,<br>I sacrifice them to His Blood.  |
| ミヨ主ノ御身ヨリ<br>苦ト愛トナカレル<br>苦愛カリアママシ<br>イバラオ□トセス   | (3) See from His Head, His Hands, his Feet,<br>Sorrow and love flow mingling down;<br>Dide'er such love and sorrow meet,<br>Or thorns compose so rich a crown? |
| 天ト地ヲサハクモ<br>供物ニタラマシ                            | (4) Were the whole realm of nature mine,<br>That were an offering far too small;   |



タルモノナラネト  
イノチヲアグベシ

Love amazing, so divine  
Demands my life, my soul, my all.

2、世々岩ハレテ  
ワカ身ヲカクセ  
キツセキ脇ニ  
ナカシシ水血  
ツミヨリ救フテ  
我ムネアラヘ

(1) Rock of ages, cleft for me,  
Let me hide myself in thee;  
Let the Water and the Blood,  
From Thy wounded Side which flowed,  
Be of sin the double cure,  
Save from wrath, and make me pure.

ナミダ流セト  
カライダスモ  
是ハ罪ケサス  
主ノミタスク  
罪代モタアズ  
十字架ニスガル

(3) Nothing in my hand I bring,  
Simply to thy Cross I cling:  
Could my tears for ever flow,  
Could my zeal no languor know,  
All for sin could not atone,  
Thou must save and Thou alone.

マブタヲトサシ  
ヒキトルイキニ  
ミス世ニホリ  
ミ位ヲミルニ  
世位岩ハレテ  
ワカ身ヲカクセ

(4) While I draw this fleeting breath,  
When mine eyelids close in death,  
When I rise to worlds unknown,  
See thee on Thy judgment throne,  
Rock of Ages, Cleft for me,  
Let me hide myself in thee.

3、エスヲ地ノ主トセン  
アマネクソヲサメン  
ソノマツリコトハ  
カキリナクアレナ

Jesus shall reign where'er the sun  
Doth his successive journeys run;  
His kingdom stretch from shore to shore,  
Till moons shall wax and wane no more.

人ハエスニネカハン  
マタツネニ貴トバン  
エスノナハナカク  
イノリテアケラル

People and realms of every tongue  
Dwell on His love with sweetest song,  
And infant voices shall proclaim  
Their early blessing on His Name.

ヲサムルトコロニ  
メクミミチミテル  
ナヤム人ハスベテ

Blessing abound where'er His reigns:  
The prisoner leaps to lose His chains;  
The weary find eternal rest,

エスノ地ニヤスメ

And all the sons of want are blest.

カレハコレヲ ウ  
信者ガタスケヲ受  
コノ身ハシストモ  
タマシイハ天ニアル

Let every creature rise and bring  
Peculiar honours to our King;  
Angels descend with songs again,  
And earth repeat the loud Amen.

Amen

バン民ハ今神ヲ  
イヤタカク救ヨ  
天ノ使ハシラセン  
ミナウヘヨ アーメン

4、アマ使ガウタウ  
ホメヨ生レシ王  
カミト人シタシム  
地ニハ太平アル  
クニグニタチテ  
カチドキアハセ  
アマ使トイヘヨ  
ベツレヘムニ生ルト

Hark! the herald-angels sing  
Glory to the new-born King,  
Peace on earth, and mercy mild,  
God and sinners reconciled.  
Joyful, all ye nations, rise,  
Join the triumph of the skies;  
With the angelic host proclaim  
Christ is born in Bethlehem.  
Hark! the herald-angels sing  
Glory to the new-born King.

天ヨリホメラル  
キリストイケレ主  
地ニクルヲミヨ  
ヲトメノウム子  
エスイマヌエル  
人トトモニスム  
カクレシ神ノ  
人トナルヲミヨ  
ヒカリトイノチ  
スベテサヅケシ

Christ, by highest heaven adored,  
Christ, the Everlasting Lord,  
Late in time behold Him come,  
Offspring of a Virgin's womb.  
Veiled in Flesh the Godhead see,  
Hail the Incarnate Deity!  
Pleased as Man with man to dwell,  
Jesus our Emmanuel.  
Hark! the herald-angels sing  
Glory to the new-born king.

太平ノアルジト  
義ノ日ヲホメヨ

Hail, the heaven-born Prince of Peace!  
Hail, the Sun of Righteousness!  
Light and Life to all He brings,  
Risen with healing in His wings.  
Mild He lays His glory by,  
Born that man no more may die,  
Born to raise the son of earth,  
Born to give them second birth.  
Hark! the herald-angels sing  
Glory to the new-born king. Amen.

試訳のためか《十字架ニカケラル》《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》では原歌詞と翻訳が対応していない部分があるが、《十字架ニカケラル》は、アイザック・ウォッツの《When I survey the wondrous cross》で、《アマ使ガウタウホメヨ生レシ王》はチャールス・ウェスレーの《Hark, herald angels sing》からの翻訳と考えて間違いないであろう。

#### 《エスラ地ノ主トセン》と奥野・ルーミス訳《エス地の主とならん》の比較

ここで矢崎健一著「手写本『早晚祷文・利多仁伊』に紹介された《エスラ地ノ主トセン》と奥野・ルーミス訳《エス地の主とならん》を比較したい。

ウィリアムズ訳

奥野昌綱・ルーミス訳『教のうた』

エスラ地ノ主トセン  
アマネクソヲサメン  
ソノマツリコトハ  
カキリナクアレナ

一 エス地の主とならん  
あまねくおさめなん  
そのまつりごとは  
かぎりなくあれな

人ハエスニネカハン  
マツツネニ貴トバン  
エスノナハナカク  
イノリテアケラル  
ヲサムルトコロニ  
メクミチミテル  
ナヤム人ハスベテ  
エスノ地ニヤスメ

二 人はエスにねがはん  
またつねにたつとばん  
エスの名はながく  
さかえてあげらる  
三 おさむるところに  
めぐみちみてり  
なやむひとはすべて  
エスのちにやすめ

カレハコレヲ　ウ	四　急すはたれをすくふ
信者ガタスケヲ受	しんじやをたすけまもる
コノ身ハシヌトモ	この身はしぬとも
タマシイハ天ニアル	たましいはいけるぞ
バン民ハ今神ヲ	五　ばんみんはいまかみを
イヤタカク救ヨ	いやたかくほめよ
天ノ使ハシラセン	てんのつかひあはせん
ミナウヘヨ　アーメン	みなうたへよあゝめん

2つの翻訳讃美歌を比較すると奥野昌綱・ルーミス訳とされる《エス地の主とならん》はウィリアムズの試訳を改訳したというより、多少の変更を加えたとはいえほとんどそのまま使用している。おそらく奥野・ルーミスはウィリアムズ訳聖歌を所持しており、それに手を加えたのではあるまいか。(注24)

#### 元田作之進著『老監督ウイリアムズ』掲載の聖歌

元田作之進著『老監督ウイリアムズ』に書かれている他の3つの聖歌《われをばたのまじ》、《なみかぜのあらき》、《われのかみに》はどの聖歌を訳したものであろうか。明治期、この3つの聖歌と同じ初行の讃美歌が他の教派の讃美歌集に収録されている。特に一致教会系『教のうた』（明治7〔1874〕年）にはこの3篇とも収録されており、奥野・ルーミス訳として伝わっている。その歌詞は以下のとおりである。

#### 第九

一　われをばたのまじ	じうじかにのぼりし
エスわれをよべり	われキリストにゆく
二　われはまちをらで	エスにこそすがれ
つみをあらはんため	われキリストにゆく
三　われはつねにまよふ	しばしばぞうたがう
うれひほうちそと	われキリストにゆく
四　われらのまづしさ	めしひとなやみは
エスみないやせば	われキリにストにゆく
五　エスはわれをいれん	きよくしてむかへん
しんずればやすません	われキリストにゆく
六　エスわれをあいして	めぐめばこそつかへ
まことにそむかで	われキリストにゆく

#### 第七

一　なみかぜのあらき	うきよをたちさり
のがるべきところ	あはれみのしたぞ
二　あゝエスとわれらが	よろこぶところわ
このちにまさりし	めぐみのみざなり
三　みなしんかうによりて	もろともにつどへ
すみかへだつとも	みざのもとふしあふ
四　よろこびてのぼる	つみやうれひなく
てんこくのさかえぞ	めぐみあるところ

第六

	われのかみに	ちかづかん
	よしやうれひ	しのびなん
	われうたふべき	われのかみに
	ちかづかまし	ともならん
二	さまようままに	われらも
	めさへくらみ	なほうたふ
	いはのまくら	ねむらんときは
	かみとわれや	あらんかも
三	われのぼりて	てんにゆかん
	かみのみわざ	よくあらん
	かみのつかひ	われをまねき
	われのかみに	ともなはん

《われをばたのまじ》、《なみかぜのあらき》、《われのかみに》の原歌詞の初行は奥野・ルーミス訳では《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、《Nearer, my God, to Thee》と伝わっている。原歌詞と翻訳を対比すると確かにそれぞれ翻訳の讃美歌であることが認められる（注25）。

奥野・ルーミスとウィリアムズの訳が初行では一致しているが、別々の場所で異なる人間が翻訳して偶然に一致するものであろうか。すなわち、「Just as I am, without one plea, But that thy blood was shed for me」から「われをばたのまじ じうじかにのぼりし」という訳が、「From every stormy wind that blows, From every swelling tide of woes」から「なみかぜのあらき うきよをたちさり」、「Nearer, my God to Thee, Nearer to Thee」から「われのかみに ちかづかん」という訳が別々の人間が翻訳して偶然生まれるものであろうか。前述のウィリアムズ訳《エスラ地ノ主トセン》と奥野・ルーミス訳《エス地の主とならん》の比較からもウィリアムズが最初に訳し、それに奥野・ルーミスが手をいれたと考えても構わないではないだろうか。しかし残念ながら奥野・ルーミス訳とされる翻訳歌詞は伝わっているが、ウィリアムズ訳は初行のみが知られるだけで全文は発見されていない。

また、《われをばたのまじ》、《なみかぜのあらき》、《われのかみに》とともに《エスラ地ノ主トセン》の改訳と思われる《エス地の主とならん》も『教のうた』に収録されている。ウィリアムズ訳の《十字架ニカケラル》の原歌詞《When I survey the wondrous cross》も奥野昌綱は《サカエノキミノ》[『聖書之抄書』(明治7 [1874] 年収録)]として訳している。また《よよいわわれて》は奥野・ルーミス訳ではないが、《われたるいわや》(本田・バラ訳)として『教のうた』に収録されている。すなわち元田作之進著『老監督ウィリアムズ』に紹介された5篇の日本聖公会の聖歌は奥野・ルーミス、本田・バラ訳として一致教会系の讃美歌集『教のうた』にすべて登場するのである。単なる偶然であろうか。讃美歌・聖歌の歴史ではいままでに奥野・ルーミス訳とウィリアムズ訳の関連は言及されたことはなく、『教のうた』に収録されている《Jesus shall reign where'er the sun》、《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、《Nearer, my God, to Thee》の訳はルーミスと奥野が独自に

訳したものとして伝えられているが(注26)、両者に深いつながりがあることは間違いないと思われる。

なお奥野昌綱訳《さかえのきみの》と本田・バラ訳《われたるいわや》と聖公会の聖歌集に関しては後述する。

### C. M. ウィリアムズ訳聖歌と奥野・ルーミス訳讃美歌から

奥野昌綱・ルーミス訳とされる《エス地の主とならん》に関しては、ウィリアムズはなにも述べていない。彼の性格・人格からくるのであろうか。元田作之進は『老監督ウィリアムズ』の序で次のように述べている。「師は謙譲陰徳の人であって如何なる形式にても自己の世に現はれんことを欲せられず、自己の性行と事業が世に公にせらるゝは決して師の素志でなかつた」(注27)。ウィリアムズは彼が先行して行った事業の荣誉を他の人間に譲ろうとさえしていた。この件に関して矢崎健一氏は『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』の中で次のように書いている。「ウィリアムズが長崎に上陸した日はいつであるかははっきりしない。彼が六月二九日に着いたと語ったという説もあるが、『老監督ウィリアムズ伝記』では七月四日(安政六年六月二日)の前後とし、『教会歴史問答』ではウィリアムズ自身六月下旬と記している。彼は日本最初の宣教師としても名誉をリギンスに与えたかったので自分の事については詳しなかつたようである」、また「ウィリアムズは常にリギンスを最初の日本宣教師として推している」(注28)。しかし大江満氏によれば実際は「リギンスは健康状態がかなり深刻と診断され、帰国の可能性を含めた一時的な保養目的で訪日したのであり、彼は宣教師として日本の地を踏んだのではなく、英語講師として長崎に入った」のであり、「彼(ウィリアムズ)は日本伝道の使命を帯びて、琉球を除く日本本土に最初に上陸したプロテスタント宣教師であつた」(注29)。

ウィリアムズの性格・人格は大いにこの件に影響を及ぼしていると思われるが、C. M. ウィリアムズ訳聖歌と奥野・ルーミス訳讃美歌の相似から、教派の違い、築地と横浜という伝道拠点の違いがありながらウィリアムズと奥野、ルーミスには現時点ではうかがい知れない交流があつたことは間違いないと思われる。

大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』の「第三章 ウィリアムズへの追想 4 日本人の追憶」では次の文章を引用している。

「当時詩篇の翻訳を企て居られ、奥野昌綱氏(日本基督教会牧師、聖書翻訳でヘボン、ブラウンを助け、讃美歌編集にも尽力した一引用者)は毎日来りたすけ居られた。時々は午食すらわすれて二時過に及んだこともあつた。」(注30)

「監督が祈禱書を用ひて祈らるゝときも、其態度といひ其語声といひ、迎もこれを祈禱書によりて、祈らるゝとは思われなかつた。師の説教に感じないものでも、其厳肅な莊重な敬虔な、而して力に満ちた祈禱には動かされた。奥野昌綱翁、監督を訪問した時、談偶ま祈禱書のことに及んだ事があつた。翁は監督に向つて、祈禱書によりて祈禱するは、形式的で誠実を欠くと非難した。監督は滔々其然らざる所以を答弁せられたが、最後に監督は祈りませうと云つて、椅子を離れ跪いて、例の謙虚な態度、敬虔の語氣を以て、祈禱を捧げられた。続いて翁も祈禱をせられたが、後で、監督さん、只今貴下のお祈には實に感じました。私は今日までこんな靈的の祈禱を聴いた事はありませんと云うと、監督は只だ一言、

これが貴下のお嫌いな祈禱書の祈禱でありますと答へられた。翁はそれ以来聖公会祈禱書を尊重し、常に座右に備へて、公私祈禱の模範とせられたそうである。」(注31)

上記の記述には残念ながら年代は特定されていない。詩篇の翻訳はウイリアムズが聖歌を翻訳したとされる時期より少し後の事情であるが(注32)、長崎時代に手をつけた祈禱書の和訳は明治5年末には完成していた。元田作之進著『老監督ウイリアムズ』の聖歌翻訳の年号は明治5年頃でほぼ符合する(注33)。上記の記述から、ウイリアムズと奥野昌綱はわれわれが想像するよりかなり早い時期から関係があったのではなかろうか。いずれにしても上記には奥野昌綱とウイリアムズが親しい関係にあることと、奥野昌綱がウイリアムズ訳の聖公会祈禱書を尊重していたことが述べられている。

### 日本聖公会聖歌の源流、その一例

奥野昌綱側だけが一方的にウイリアムズを尊敬していたのであろうか。ウイリアムズも奥野昌綱の讚美歌作家としての資質を高く評価していたのではなかろうか。推論の域を出ないが筆者がそう考える理由を以下に展開する。

「どの英語讚美歌(集)から訳したのか、原歌詞との対比」の章で筆者は『聖公會歌集』と《Rock of ages》の翻訳に関しては後述する」と述べた。アメリカ聖公会のチング編『聖公會歌集』(明治16[1883]、明治17[1884]、明治20[1887]年)では、《Rock of ages》の訳としてウイリアムズ訳《世々岩ハレテ》、あるいはその改訳を採用しないばかりか、本田・バラ訳《われたるいわや》の改訳と思われる訳を採用している。そして『聖公會歌集』では、アイザック・ウォッツの《When I survey the wondrous cross》の翻訳としてはウイリアムズ訳《十字架ニカケラル》、あるいはその改訳を採用しないばかりか、奥野昌綱訳《さかえのきみの》の改訳と思われる訳を採用しているのである。そしてこの2曲の訳は改訳されて現行『古今聖歌集』の第387番《ちとせのいわよ》、第77番《みさかえのきみの》として受け継がれている。日本聖公会聖歌の源流の一つに日本基督教会系の讚美歌の流れがあるということになる。なお、T. S. チング(アメリカ聖公会)編の『聖公會歌集』(明治16[1883]年)の序にはH. エヴィントン、C. F. ワーレン(CMS)、H. J. フォス(SPG)への賛辞とともに奥野昌綱への賛辞も述べられている。

《Rock of ages》の第一節を『教のうた』収録の本田・バラ訳、『聖公會歌集』、『古今聖歌集』(明治35[1902]年)、現行『古今聖歌集』、及び『基督公会之歌』、『真神讚美歌』で比較してみる。

本田・バラ訳(明治7年)	『聖公會歌集』(明治16年)	『古今聖歌集』(明治35年)			
『教のうた』第8	第96	第293			
われたるいわや	われをかこめな	いはなるエスよ	わがみをかこみ	ちとせのいはよ	わがみをかこめ
さけたるわきの	みづまたちしほ	さかれしわきの	ちとみづをもて	さかれしわきの	ちしほとみづに
つみもなやみも	きよくあらへよ	わがつみあらひ	みをきよめてよ	つみもけがれも	あらひきよめよ

現行『古今聖歌集』（昭和34年）  
第387

『基督公會之歌』（明治14年）  
第24

『眞神讃美歌 全』（明治15年）  
第41

ちとせの いわよ わが 身を かこめ	イエスなるいわよ わがみをかこめ	破 <sup>は</sup> たる岩よ われをばかこめ
さかれし わきの ちしおと みずに	さけしみわきの ちとみづをもて	さきたるわきの 水と血をもて
つみも けがれも あらひ きめよ	つみもなやみも あらひきよめよ	つみもなやみも あらひきよめよ

ウィリアムズ訳「世々岩ハレテ ワカ身ヲカクセ」では他の訳「かこめ」が「かくせ」になっている。他の聖公会系の訳は本田・バラ訳の影響を受けていると思われる。ウィリアムズ訳「キツセキ脇ニ ナカシシ水血」の部分は影響関係が判断できない。ウィリアムズ訳「ツミヨリ救フテ 我ムネアラへ」の部分は「あらう」ということでは本田・バラ訳と共通だが、本田・バラ訳「きよく」が「きよめ」となって他の聖公会系聖歌に連なっていく。上記聖公会系の訳は本田・バラ訳の影響の下に生まれたと考えてよいであろう。

一方日本基督教会系はどのような系譜になったのであろうか。第1節を掲載する。

『改正讃美歌』（明治9年）  
第21

『讃美歌 全』（明治14年）  
第11

『讃美歌』（明治36、昭和6、29年）  
第215、262、260

よ われたるいはや わがみをかこめな	われたるいはよ われをかこめな	ちとせのいはよ わが身をかこめ
さきたるわきの 水また血しほ	さかれしわきの みづまたちしほ	さかれしわきの ちしほ（お）とみづに
つみもなやみも きよくあらへよ	つみもなやみも きよくあらへよ	つみもけがれも あらひ（い）きよめよ

この系譜をみると、本田・バラ訳を多少改訳しただけで『讃美歌』（明治36年）で固定化し、『讃美歌』（明治36年）は昭和6年、29年と2度の改訂があったが歌詞の変更はしていない。『古今聖歌集』（明治35年）と『讃美歌』（明治36年）の歌詞が同一なのは2つの讃美歌集の協力関係をあらわしている。それぞれ序文には共用（共通讃美歌）の経緯が述べられている（注34）。

『聖書之抄書』（明治7〔1874〕年）収録の奥野昌綱訳《サカエノキミノ》と聖公会の歌集を比較してみよう。

奥野昌綱訳（明治7年）  
『聖書之抄書』第6

『聖公会歌集』（明治16年）  
第31

『古今聖歌集』（明治35年）  
第74

サカヘノキミノ ジウジカヲミレバ	さかえのきみの じふじをみれば	さかえのきみの 十字架をみれば
タフトキモノモ モノハカズカハ	よのとみほまれ のぞみはすべて	とみもほまれも のぞみもなべて
ホコレルコトモ ナニモアラジナ	わがみにとりて ものゝかずかは	ものゝかずかは ほこるにたらず



現行『古今聖歌集』(昭和34年)  
第77

『眞神讃美歌 全』(明治15年)  
第40

『聖公會讃美歌』(明治25年)  
第71

さかえのきみの 十字架を あおげば さかえのきみの 十字架をみれば さかえのきみの じふじをみれば  
世の とみ ほまれぞ うたかたと 消ゆる たふときものも ものゝかざかは とみもほまれも のぞみもすべて  
ほこれることも なにもあらじな われにとりては ものゝかざかは

日本基督教会系では「さかえの・・・」ではじまる讃美歌が『改正讃美歌』(明治9年)、(『讃美歌全』(明治15年)、『讃美歌〔改正増補〕』(明治16年)、『新撰讃美歌』(明治21年)、『讃美歌』(明治36年、昭和6、29年)、そして『讃美歌 21』(平成9年)と系譜していく(注35)。《When I survey the wondrous cross》のウィリアムズの訳は以下の如くである。

十字架ニカケラル  
ワカキミミルトキ  
世ノトミリアラス  
タカブリナサマシ

ウィリアムズと奥野昌綱の訳では「十字架」は共通している訳語だが、他の日本聖公会系では「サカエノキミノ」、「モノノカズカワ」と奥野昌綱と同じ訳語を使用し「ホコレル」「ほこる」等同じ意味の言葉が多用され、文脈も同様である。これは奥野昌綱の影響の下で生まれたと言って過言ではないであろう。

『聖公會歌集』(明治16年)をはじめとする日本聖公会系の聖歌集では、《Rock of ages》の訳は本田・バラ訳からの影響を受け、《When I survey the wondrous cross》の訳は日本基督教会系奥野昌綱訳の改訳であった。これをどう考えればよいのであろうか。その後の日本基督教会系の讃美歌集は多少の改訳が加えられながら《われたるいわや》《さかえのきみの》の訳が継承されていくが、日本聖公会系ではなぜウィリアムズ訳は改訳の対象とならなかったのであろうか。筆者は両者に翻訳上の優劣はないと考える。すなわちウィリアムズ訳が翻訳として劣っているとは思えない。『聖公會歌集』はアメリカ聖公会のチングが編集しているが、同じアメリカ聖公会の、しかも主教、監督のウィリアムズをさしおいて日本基督教会系の讃美歌を改訳した理由は何であろうか。W. B. ライト、A. R. モリス、元田作之進のようにウィリアムズが聖歌を翻訳していたことを知る人はいたのである。

筆者はその理由はウィリアムズ自身にあったと考える。彼は先駆者として評価されることを嫌った。もしかすると、日本で最初の讃美歌を翻訳したとされるゴープル、クロスビーより先に訳していたのであるまいか。そのことを自覚していたので、日本最初の宣教師としての名誉をリギンスに与えたように、かえってこの件で何も発言しなかったとも考えられる。

またウィリアムズが試訳はしたものの聖歌翻訳の改訂を多忙等何らかの理由で断念し、聖書翻訳の場合と同様、奥野、ルーミスに託した可能性も考えられる(注36)。ウィリアムズは奥野昌綱の讃美歌作家としての資質を高く評価していたのではなからうか。まだ当時は讃美歌・聖歌の揺籃期である。ウィ

リアムズは奥野昌綱の讃美歌作家としての将来性を見抜いていたのではなかろうか。それ故自ら訳した聖歌を奥野に託し、それを使用されても『教のうた』クレームもつけず、聖公会の聖歌集（『聖公会歌集』）に教派が違ふ奥野訳の改訳を採用しても問題にしまなかつたのではなかろうか。なお、塩谷栄二氏によればエヴィントンの『たゝへのうた』（明治7年）には、奥野昌綱及び日本基督教会系『教のうた』の影響が認められるとのことである（注37）。

その後奥野昌綱は日本の讃美歌史に重要な働きをする。約30年後日本教会音楽の父（注38）宣教師オルチンは述べている。「松山〔高吉〕師と奥野師の名前は、この三〇年間の日本の讃美歌のことを思い起こさせる。彼らは、この分野の先駆者としてクリスチャンの中に、感謝の念とともにいつまでも記憶されるであろう。現在まで残って、使われている讃美歌に、これほど貢献した人は二人をおいて他にはいない」（注39）。

大江満氏によれば「ウィリアムズは伝道主教として、つねに自分にとってでなく、ミッションにとって有益かどうかを判断基準にしていた」（注40）。さらにこの聖歌翻訳に関しては、ウィリアムズはキリスト教界にすぐれた聖歌、讃美歌が残るのであれば、教派も超え、ましてや日本聖公会、あるいは日本最初の聖歌の作者であるという個人の栄位は、既に関心のないところだったのでなかろうか。

最後の章は推論の域をでていない。推論から脱却するためにもウィリアムズの他の翻訳聖歌の発見が待たれるとともに、奥野昌綱側からの資料の発掘にも期待したい。

## 注

- (1) 拙著「日本聖公会聖歌目録」『立教学院史研究』第3号（立教学院史資料センター 平成17〔2005〕年3月）、117頁。
  - (2) 「イギリス」『日本キリスト教歴史大事典』（教文館 昭和63〔1988〕年2月）、92頁。
  - (3) B. H. チェンバーレンの「讃美之歌」に関しては拙訳「詩篇日本語訳への提言（B. H. チェンバーレン）」『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社 平成11〔1999〕年11月）、266-308頁を参照。
  - (4) 拙著「日本聖公会聖歌目録」『立教学院史研究』第3号（立教学院史資料センター 平成17〔2005〕年3月）、156-177頁。
- C. F. ワーレン、H. J. フォスは、聖歌集とともに伝統的に用いられてきた表記（シ、エフ、ワレン・エイチ、ゼ、フォス＝ ヒウ・ゼ・フラス）を用いた。

元田作之進著「日本聖公会の讃美歌」『日本聖公会史』（日本聖公会出版社 明治43〔1910〕年10月）、75-78頁ではバックストンの『救の歌』、三谷〔種吉〕の『福音唱歌』を日本聖公会の讃美歌としてあげているが、バックストンの『救の歌』と三谷〔種吉〕の『福音唱歌』はその後の系譜が〔純〕福音系のためここには掲載しなかつた。

また、元田作之進著「日本聖公会の讃美歌」には、『たゝへのうた』（エヴィントン著、明治7〔1874〕年）、『聖公会讃美歌』（アンドリウス編、明治15〔1882〕年）の記述があるが所蔵先不明である。曲数等記述が具体的なので刊行されたものと思われる。発見されることを期待して、一覧表に掲載した。

- (5) 『古今聖歌集』（昭和34〔1959〕年4月版）序、1頁。この序の記述に典拠はない。貫民之介の報告によると伝わっているが、塩谷栄二氏も指摘しているように、おそらく落合吉二著「日本聖公会音楽史序説」『教会文化』第1巻2



ー113頁。「彼らは聲を合せて詩九十五篇を誦し、日本語に譯されたる『Rock of ages』を歌い申候」。

この書簡は『The Spirit of Missions』リール 8/3 Vol.38, June 1873 Japan: Letter from the Rev. A. R. Morris. Osaka, Japan, March 14, 1873. pp.387-389. この中の Japanese Service(p.388)に記載がある。

They join chanting Venite and in singing “Rock of Ages” which has been rendered into Japanese.

また『The Spirit of Missions』には《Rock of Ages》が日本語で歌われた他の記述も存在する。

リール 9/1 Vol.39, August, 1874 Japan: Letter from the Rev. C. T. Blanchet. Yedo, Japan, May 21, 1874. p.504. この中の The work at Yedoに記載がある。

We were to have Service in Japanese again. They responded heartily and made a bold effort at singing our familiar hymns “Rock of Ages” and “When I survey the wondrous Cross.”

上記の典拠は、大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』(刀水書房 平成12[2000]年5月)、416、443頁。

(12) 海老沢有道『日本の讃美歌』(香柏書房 昭和22[1947]年5月)、41頁。「プロテスタント中、最も早く渡来した聖公会は既に一八七二年(明治五年)に讃美歌集を編纂したとも云われるが、恐らく試作がなされていた程度であろう」。

(13) G. F. フルベッキ著『日本プロテスタント伝道史 明治初期諸教派の歩み 上(日本基督教会歴史資料集7)』(日本基督教会歴史編纂委員会 昭和59[1984]年10月)、90頁。

(14) 矢崎健一著「手写本『早晚祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号(立教大学一般教育部編集委員会 昭和40[1965]年9月)、1~40頁。矢崎氏はこの聖歌をその著『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』でも紹介している。矢崎健一著『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』(聖公会出版 昭和63[1988]年11月)、83~84頁。

(15) 矢崎健一著「手写本『早晚祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号(立教大学一般教育部編集委員会 昭和40[1965]年9月)、1頁。

(16) 矢崎健一著「手写本『早晚祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号(立教大学一般教育部編集委員会 昭和40[1965]年9月)、9頁。

ここで、矢崎氏は海老沢有道『日本の讃美歌』(香柏書房 昭和22[1947]年5月)、付録一から《エス地の主トセン》が明治七年神戸版『さんびのうた』の第二《エス地の主とならん》と相当することを述べているが、原歌詞等の言及はなされていない。

(17) 矢崎健一著「手写本『早晚祷文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号(立教大学一般教育部編集委員会 昭和40[1965]年9月)、10~13頁。

(18) 筆者は海老沢有道編『立教学院百年史』よりこの資料の存在を知った。海老沢有道編『立教学院百年史』(立教学院 昭和49[1974]年11月)、95、99頁。

(19) 今井丞治著『よよいわわれて』Rock of Ages 考』『礼拝研究』No. 3(1984年)、21~22頁。英詩は『The Hymnal of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』(1940)からのものと述べている。

(20) 2005年11月25日、今井丞治氏に直接おうかがしたところ、当時矢崎論文の存在をご存じなかったとのことであった。また今井丞治氏はW. B. ライト書簡を筆写したがコピーはとらなかったとのことだったが、2005年12月8

日に白井堯子氏にこのコピーと活字になった『Mission Field』の1874年12月号 (Dec. 1. 1974) をいただいた。これを今井丞治氏にお送りしたところ「×××」と解説不明箇所としたところは「みぬよ」であることと、矢崎資料との相違点のご連絡があった。(2005年12月14日付書簡)

W. B. ライト書簡によるとウイリアムズは数篇の聖歌を翻訳していたようである。

We are teaching them to sing. Bishop Williams has translated some hymns into Japanese among others “Rock of ages.” Which the following as a copy.

Yoyo iwa warete  
Waga mio kakuse  
Kizu seshi wakini  
Nagareshi Midzuchi  
Tsumi Yori sukuite  
Waga Mune araye  
Namida nagasedo  
Chikara idasu mo  
Kowa tsumi kesanu  
Nushi nomi tasuku!  
Tsumi shiro motazu  
Jujika ni sugaru  
Mabuta wo tozashi  
Hikitoru iki ni  
Minu yoni nobori  
Mikurai wo miru ni  
Yoyoiwa warete  
Waga mio kakuse

which the following is a copy.  
Yoyo iwa warete  
Waga mio kakuse  
Kizu seshi wakini  
Nagareshi midzuchi  
Tsumi yori sukuite  
Waga mune araye  
Namida nagasedo  
Chikara idasu mo  
Kowa tsumi kesanu  
Nushi nomi tasuku!  
Tsumi shiro motazu  
Jujika ni sugaru  
Mabuta wo tozashi  
Hikitoru iki ni  
Minu yoni nobori  
Mikurai wo miru ni  
Yoyoiwa warete  
Waga mio kakuse

今井丞治氏は「×××」と解説不明箇所としたところは矢崎資料の「みぬよ」と判読。また12行目「じゅうじかにすがれ」は「じゅうじかにすがる」に、16行目「みくらをみるに」は「みくらいをみるに」にわたしには思える。

それを上記に活字化した。

- (21) 元田作之進著『老監督ウイリアムズ』(京都地方部故ウイリアムズ監督記念実行委員事務所 大正3 [1914]年)、231頁。矢崎健一著「手写本『早晚禱文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号(立教大学一般教育部編集委員会 昭和40 [1965]年9月)、1~40頁。海老沢有道編『立教学院百年史』(立教学院 昭和49 [1974]年11月)、95、99頁。今井丞治著「『よよいわわれて』Rock of Age考」『礼拝研究』No. 3 (1984年)、21~22頁。
- (22) 矢崎健一著「手写本『早晚禱文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号(立教大学一般

教育部編集委員会 昭和40〔1965〕年9月）、9頁。

- (23) 筆者は京都のウィリアムズ神学院にうかがい、ウィリアムズ旧蔵資料を閲覧した。讃美歌・聖歌集でこの年代と符合する讃美歌・聖歌集は以下の2点である。『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868)、『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』(New York: James Pott, 1871, rev. 1874) 『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868) には、Shanghai Christmas 1870 とネルスン一家からの献辞の書き込みがあるが、名前のところが破損している。ネルスンは中国在宣教師。ウィリアムズは当時上海から書簡を発信しており、上海にいたものと思われる。大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』(刀水書房 平成12〔2000〕年5月)、249、261、275、776-777頁。ウィリアムズは1870年以来『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868) を所持し続けていたと思われる。ウィリアムズが京都に住んだのは晩年(明治28~41年)であり、明治9年11月29日の築地の火災で図書と家財の大半を焼失している。元田作之進著『老監督ウィリアムズ』(京都地方部故ウィリアムズ監督記念実行委員事務所 大正3〔1914〕年)、133頁。大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』(刀水書房 平成12〔2000〕年5月)、452頁。明治11年12月26日にも大火に会いウィリアムズの住宅も再度焼失する。大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』(刀水書房 平成12〔2000〕年5月)、414-415頁。

この2点から翻訳したとは即断できないが、当時のイギリス、アメリカで使用されていた聖歌集であり、ウィリアムズがその明治5~7年頃所蔵していた可能性は高いと考える。特に『Hymns ancient and modern』(London: William Clowes, 1868) には、shanghai Christmas 1870 と書き込みがあり、焼失をまぬがれ1870年以来所持し続けていたと思われる。

『Hymns ancient and modern』と『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』では歌詞に多少の変更があるばかりではなく、『Rock of ages』は『Hymns ancient and modern』では3番まで、『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』では4番までである。日本語訳は3番までなのでウィリアムズはまず、『Hymns ancient and modern』を参照したのではなかろうか。《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、は『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』しか収録されていない。《Jesus shall reign where'er the sun》、《Rock of ages》《When I survey the wondrous cross》、《Hark, herald angels sing》《Nearer, my God, to Thee》は『Hymns ancient and modern』から、《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、は、『Hymnal according to the use of the Protestant Episcopal Church in the United States of America』からの歌詞を掲載した。《Just as I am, without one plea》、《From every stormy wind that blows》、《Nearer, my God, to Thee》は(注24)。なお《Rock of ages》と《Nearer, my God, to Thee》は4節あるところ3節しか訳していない。

- (24) ウィリアムズ訳《エスラ地ノ主トセン》の翻訳年が明治5-6年、奥野・ルーミス訳の《エス地の主とならん》が明治6-7年と考えられるので、奥野・ルーミス訳が先行である可能性も否定できない。しかし、「エスラ地ノ主トセン」「エス地の主とならん」、「カレハコレヲウ」「ゑすはたれをすくふ」、「信者ガタスケラ受」「しんじやをたすけまもる」等はウィリアムズ訳の奥野・ルーミスによる改訂をあらわしていると考えられるので、ウィリアムズ訳が先行であることは間違いないと思われる。

『Hymnal according to the use of the Protestant  
Episcopal Church in the United States of America』, No. 392.

- |   |   |
|---|---|
| 一 われをばたのまじ<br>じうじかにのぼりし<br>エスわれをよべり<br>われキリストにゆく    | 1 Just as I am, —without one plea,<br>But that thy blood was shed for me,<br>And that thou bidd'st me come to thee,<br>O Lamb of God, I come. |
| 二 われはまちをらで<br>エスにこそすがれ<br>つみをあらわんため<br>われキリストにゆく    | 2 Just as I am, —and waiting not<br>To rid my soul of one dark blot,<br>To thee, whose blood can cleanse each spot,<br>O Lamb of God, I come. |
| 三 われはつねにまよふ<br>しばしばぞうたがう<br>うれひはうちそと<br>われキリストにゆく   | 3 Just as I am, —though toss'd about<br>With many a conflict, many a doubt,<br>Fightings and fears within, without,<br>O Lamb of God, I come. |
| 四 われらのまづしさ<br>めしひとなやみは<br>エスめないやせば<br>われキリストにゆく     | 4 Just as I am, —poor, wretched, blind—<br>Sight, riches, healing of the mind,<br>Yea, all I need, in thee to find,<br>O Lamb of God, I come. |
| 五 エスはわれをいれん<br>きよくしてむかへん<br>しんずればやすません<br>われキリストにゆく | 5 Just as I am, —thou wilt receive,<br>Wilt welcome, pardon cleanse, relieve;<br>Because thy promise I believe,<br>O Lamb of God, I come.     |
| 六 エスわれをあいて<br>めぐめばこそつかへ<br>まことにそむかで<br>われキリストにゆく    | 6 Just as I am, —thy love unknown<br>Has broken every barrier down;<br>Now to be thine, yea, thine alone,<br>O Lamb of God, I come.           |

『Hymnal according to the use of the Protestant  
Episcopal Church in the United States of America』, No. 402.

- |   |   |
|---|---|
| 一 なみかぜのあらしき<br>うきよをたちさり<br>のがるべきところ<br>あはれみのしたぞ | 1 From every stormy wind that blows,<br>From every swelling tide of woes,<br>There is a calm, a sure retreat;<br>'Tis found beneath the mercy-seat.     |
| 二 ああエスとわれらが<br>よろこぶところわ<br>このちにまさりし<br>めぐみのみざなり | 2 There is a place where Jesus sheds<br>The oil of gladness on our heads—<br>A place than all beside more sweet,<br>It is the blood-stained mercy-seat. |

- |  |  |
|--|--|
| <p>三 みなしんこうによりて<br/>         もろともにつどへ<br/>         すみかへだつとも<br/>         みざのもとふしあふ</p> | <p>3 There is a spot where spirits blend,<br/>         Where friend holds fellowship with friend;<br/>         Through sunder'd far, by faith they meet<br/>         Around one common mercy-seat.</p>   |
| <p>四 よろこびてのぼる<br/>         つみやうれひなく<br/>         てんこくのさかえぞ<br/>         めぐみあるところ</p>   | <p>4 There, there, on eagles' wings we soar,<br/>         And time and sense seem all no more;<br/>         And heaven comes down, our souls to greet,<br/>         And glory crowns the mercy-seat.</p> |

『Hymns ancient and modern』, Hymn 200.

- |   |   |
|---|---|
| <p>一 われのかみに<br/>         ちかづかん<br/>         よしやうれひ<br/>         しのびなん<br/>         われうたふべき<br/>         われのかみに<br/>         ちかづかまし<br/>         ともならん</p> | <p>1 Nearer, my God to Thee,<br/>         Nearer to Thee;<br/>         E'en though it be a cross<br/>         That raiseth me,<br/>         Still all my song shall be,<br/>         Nearer, my God to Thee,<br/>         Nearer to Thee!</p> |
| <p>二 さまようままに<br/>         われらも<br/>         めさへくらみ<br/>         なほうたふ<br/>         いはのまくら<br/>         ねむらんときは<br/>         かみとわれや<br/>         あらんかも</p> | <p>2 Though, like a wanderer,<br/>         The sun gone down,<br/>         Darkness comes over me,<br/>         My rest a stone;<br/>         Yet in my dream I'd be<br/>         Nearer, my God to Thee,<br/>         Nearer to Thee!</p>    |
| <p>三 われのぼりて<br/>         てんにゆかん<br/>         かみのみわざ<br/>         よくあらん<br/>         かみのつかひ<br/>         われをまねき<br/>         われのかみに<br/>         ともならん</p> | <p>3 There let my way appear<br/>         Steps unto heaven:<br/>         All that Thou sendest me<br/>         In Mercy given:<br/>         Angels to beckon me<br/>         Nearer, my God to Thee,<br/>         Nearer to Thee!</p>        |

(26) Loomis, Clara Denison, 『Henry Loomis, friend of the East』 (New York: Fleming H. Revell, c1923), p. 45.



Mr. Loomis himself constructed a series of Bible maps and assisted the Bible Translation Committee by making out a table of Biblical names in the Japanese script. With his teacher's aid he also began translating hymns for use in Christian services, such as "Jesus shall reign," "My faith looks up to Thee," "Nearer, my God, to Thee," "Just as I am," "From every stormy wind that blows," "There is no name so sweet on earth," and "Jesus loves me." It was not easy to observe the exacting rules of Japanese versification and at the same time convey in any recognisable form the Christian ideas. Judged by later standards of missionary scholarship the results were crude, though they stood for hours of patient labour. My Loomis's first collection was published in 1874, and a second and enlarged edition came out two years later. Other missionaries were at work on similar collections about the same time. From the beginning the Japanese loved their hymns and, even before they knew the tunes, would all join lustily in the singing.

松下孝氏のご教示による。

上記に掲載されている7篇の讃美歌は翻訳され『教のうた』に収録されている。『教のうた』収録の《Jesus loves me》の訳《エスわれを愛す》は奥野昌綱・ルーミス訳であるが、バラ氏からわたされた《Jesus loves me》の逐語訳の改訳であることが伝わっている。[オルチン著、拙訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社 平成11 [1999]年11月）、325頁]。その部分を掲載する。

ルーミス氏の話によると、「奥野氏は、一八七三年夏ころ、バラ氏から《Jesus loves me》の逐語訳を渡された。バラ氏の翻訳では "For the Bible tells me so" の部分が『聖書はそう話します』になっていたが、奥野氏ならば、聖書は話などしなないと主張して、そのようには翻訳しなかったであろう。バラ氏の翻訳を、讃美歌の形になるようにと組み立てることが、奥野氏と私が最初にしよとした仕事だった。一略—

奥野氏も次のように述べている。「ミス・クロスビーと大坪師が翻訳した《Jesus loves me》は不完全なものであったので、五、六人の人が協力して改作した。横浜地区の初期讃美歌のすべては、翻訳したのが外国人であるか否かにかかわらず、誤りを正すために私のところに持ち込まれた」。

《Jesus loves me》の初訳はクロスビー訳であるが、改訳でも翻訳者であると主張できるのであろうか。そうであるならばウィリアムズ訳が先行して存在していることを無視しても構わないことになる。

なお、この『Henry Loomis, friend of the East』には、ウィリアムズの名前も、聖公会に関しても何も書かれていない。

- (27) 元田作之進著『老監督ウィリアムズ』（京都地方部故ウィリアムズ監督記念実行委員事務所 大正3 [1914]年）、序1頁。
- (28) 矢崎健一著『チャニング・ムーア・ウィリアムズ』（聖公会出版 昭和63年 [1988]年11月）、43~44頁。
- (29) 大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』（刀水書房 平成12 [2000]年5月）、154、155頁。
- (30) 大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』（刀水書房 平成12 [2000]年5月）、670頁。その典拠として『基督教週報』第19巻第8号（明治42 [1909]年4月23日）をあげている。この小文を書いた清水友輔について大江氏は以下のように述べている。「清水友輔は『老監督ウィリアムス師のおもかげ』と題した小文を雑誌『あけぼの』に投稿し、『基督教週報』にも転載された。一八七九（明治一二）年洋学のため上京した清水は、当時『築地の乞食学校』と呼ばれ古長屋の寄宿舎の立教学校に入学し、ウィリアムズから英語や歴史を学んでいる」。大江満

著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』（刀水書房 平成12〔2000〕年5月）、669頁。

- (31) 大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』（刀水書房 平成12〔2000〕年5月）、677-678頁。その典拠として元田作之進著『老監督ウィリアムズ』（京都地方部故ウィリアムズ監督記念実行委員事務所 大正3〔1914〕年）、204頁をあげている。

なお、奥野氏側からはこれに類する資料はいまのところ存在しないとのことである。（岡部一興氏の私信による）。

- (32) 大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』（刀水書房 平12〔2000〕年5月）、577頁。「八二年一月二三日の書簡でウィリアムズは、詩篇の邦訳をフルベッキとともに任命されたと述べており、祈禱書邦訳作業に続いて聖書翻訳委員の仕事もあった」。また1881年10月31日付ウィリアムズ宛フルベッキ書簡にも詩篇翻訳に関する二人の関係と事情が述べられている。元田作之進著『老監督ウィリアムズ』（京都地方部故ウィリアムズ監督記念実行委員事務所 大正3〔1914〕年）、235-236頁。

（注11）の詩篇95は Venite と、英語祈禱書に記されたラテン語の冒頭が書かれている。祈禱書邦訳作業で訳された詩頌を詩篇翻訳とするのであれば、明治6年頃でウィリアムズの聖歌翻訳の時期と合致する。この他ウィリアムズによる詩篇の部分訳に関しては、海老沢有道著「C・M・ウィリアムズ訳『十誡』と『マタイ福音書』」「C・M・ウィリアムズ訳『朝晩禱文、附リタニー』」「日本の聖書（新訂増補版）」（日本基督教団出版局 昭和56年〔1981〕年4月）、139-145、261-272頁を参照。資料に関しては、〔フイエテノ頌（詩九十五篇）、ユヒラテノ頌（詩百篇）、カンダテドミノ頌（詩九十八篇）、デウスミセラトルノ頌（詩六十七篇）、ベニネデク、アニマア、メア頌（詩百三篇）〕（明治4-6年）は、矢崎健一著「手写本『早晚禱文・利多仁伊』について」『立教大学研究報告・人文科学』第18号（立教大学一般教育部編集委員会 昭和40〔1965〕年10月）、22-23、27、31、39-40頁を、〔『朝晩禱文、附リタニー』（詩九十五篇、詩百篇、詩九十八篇、詩九十二篇、詩六十七篇、詩百三篇）（明治10-11年）に関しては、矢崎健一著「朝晩禱文付リタニーの研究」『立教大学研究報告・人文科学』第9号（立教大学一般教育部編集委員会 昭和35〔1960〕年12月）、49-85頁を、『聖公会禱文』「婚姻式」（詩百二十八篇、詩六十七篇）、「看視病文」（詩七十一篇、詩百三十篇）、「埋葬礼式」（詩三十九篇、詩九十篇）、「産後謝恩式」（詩百十六）（明治12年）に関しては、矢崎健一著「聖公会禱文（四）」『立教大学研究報告・人文科学』第16号（立教大学一般教育部編集委員会 昭和39〔1964〕年6月）、40-45、47-49、61-62、68-70、75-77、79-80頁を参照。

- (33) 矢崎健一著「C・M・ウィリアムズの訳書と著書」『キリスト教史学』第16集（1965年9月）、57頁と（注10）。
- (34) 『古今聖歌集』（日本聖公会出版社 明治35〔1902〕年6月）、序2頁、「本集の成るや本委員会等は他の讃美歌の編集者及版權所有者諸君に對し大なる厚意を受けたることを感謝す一略」。『讃美歌』（教文館 明治36〔1903〕年11月）、3-4頁、「メソヂスト教會の代表者は日本聖公會よりあげられたる委員と共に、協議委員會に列し、ことに著名なる讃美歌百首以上の歌詞をとゝのへ、相当なる譜を之に適合せしめ、以て後來出版せらるべき本書の如きものに共通の材となしぬ。この事業は明治三十四年八月に成り、計百二十五首の讃美歌を得たり。これは共通讃美歌と稱し、同年十二月日本聖會にて用ゐるため出版せられたる古今聖歌集にまづ載せられつ。而してまたこの書にも編入せられたり」。
- (35) 『改正讃美歌』（明治9年）第28番、（『讃美歌 全』（明治15年）第21番、『讃美歌〔改正増補〕』（明治16年）、『新撰讃美歌』（明治21年）第109番、『讃美歌』（明治36年）第84番、『讃美歌』（昭和6年）第129番、『讃美歌』（昭和29年）第142番、そして『讃美歌 21』（平成9年）第297番。『讃美歌』（昭和6年）『讃美歌』（昭和6年）から「さかえのきみの」が「さかえの主イエス」に変更されている。『讃美歌』（明治36年）の訳が『古今聖歌集』（明治35年）と同一なのは《ちとせのいわよ》の場合と同様である。第1節のみを掲載する。

『改正讃美歌』（明治9年） 『讃美歌 全』（明治14年） 『讃美歌 [改正増補]』（明治16年）

さかえのきみの 十字架をみれば さかえのきみの 十字架をみれば さかえのきみの 十字架をみれば  
たふときものも ものゝかずかは たふときものも ものゝかずかは たふときものも ものゝかずかは  
ほこれることも なにもあらしな ほこれることも なにもあらしな ほこれることも なにもあらしな

『新撰讃美歌』（明治21年）

『讃美歌』（明治36年）

さかえのきみの じふじかをみれば さかえのきみの 十字架をみれば  
たふときものも ものゝかずかは とみもはまれも のぞみもなべて  
ほこるべきこと われにはあらしな ものゝかずかは ほこるにたらし

『讃美歌』（昭和6、29年）『讃美歌 21』（平成9年）

さかえの主イエス 十字架をあおげば  
世のとみほまれは ちりにぞひとしき

- (36) 海老沢有道著『日本の聖書（新訂増補版）』（日本基督教団出版局 昭和56 [1981年]4月）、261頁。「一八七一年（明治五年）の大阪テモテ学校の主日は日本語礼拝を行なっており [略]すでに日課指定の聖書部分はある程度和訳していたことと思われる。しかし、彼は翻訳委員とは別個に聖公会訳を作る考えは全くなかった。翻訳委員に挙げられながら、それに加わらず、聖公会の人々も一時参加したものの結局辞退しているが、へボンを信頼したものと思われる」。
- (37) 塩谷栄二著「日本聖公会：聖歌集の歴史と謎」『日本聖公会第9回歴史研究者の集い』（平成9 [1997]年5月13日配付資料）。
- (38) 『New York Times』(Saturday, Nov. 22, 1935), "The father of church music in Japan".
- (39) Allchin, George, 「Hymnology in Japan」『Proceedings of the General Conference of Protestant Missionaries in Japan, Held in Tokyo October 24-31, 1900.』（Methodist Publishing House 1901年）拙訳「日本における讃美歌」『讃美歌・聖歌と日本の近代』（音楽之友社 平成11 [1999]年11月）、330頁。
- (40) 大江満著『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯』（刀水書房 平成12 [2000]年5月）、591頁。

## 謝辞

「日本聖公会聖最初の聖歌、C. M. ウィリアムズ訳聖歌をめぐって」を執筆するにあたって以下の方々のお世話になった。この場を借りて謝意を表したい。諫山禎一郎氏、今井烝治氏、大江満氏、岡部一興氏、加納重郎氏、塩谷栄二氏、白井亮子氏、谷口寛氏、松下孝氏、山中一弘氏、立教大学図書館の方々。（五十音順）